

東京大都市圏における独身女性の居住地選択

— 定性的分析による考察 —

A Study on Single Women's Residential Choice in
Tokyo Metropolitan Area by Using Interview Methods

神谷浩夫・影山穂波・木下禮子

I. はじめに

単独世帯の増大が注目されるようになったのは、欧米においては 1950 年代以降である (Hall et al., 1987)。単独世帯はとくに、雇用における専門職の増大やジェントリフィケーションとの関連性の点から地理学において注目を浴びてきた。単独世帯の増大は、これまでの社会の諸制度が前提としてきた核家族の相対的な減少を意味している。こうした現象は、程度の違いはあれ日本においても同様に認められる。世帯構造は社会構造の基底を形成しているため、単独世帯の増大は社会に対して大きな影響を与えらると思われ。

しかし、単独世帯を構成する人口は非常に多様であるため、その実態把握がまだ十分に行なわれていない。Hall et al. (1987) が単独世帯増大の人口学的要因として挙げているのは、両親の世帯からの巣立ちの早まり、結婚年齢の上昇、婚姻関係を伴わない同居男女の増大、子供の数の減少、離婚の増大、高齢化などである。単独世帯の増大は社会経済的要因によっても促進される。それは、農業などの世帯単位で維持される生業的経済活動の比重の低下、サービス化経済の進展、年金など高齢者の生活維持のための社会保障の充実、等が考えられる。その結果生まれた単独世帯は、「シングル」と巷間で呼ばれている 20 代～30 代の未婚の男女であったり、配偶者と離婚や死別した中高年層、そして高齢者単独世帯など様々である。このうち単身赴任者と高齢者単独世

帯に関して、石川 (1999) は国勢調査から得られるデータを基にして京浜と京阪神の大都市圏における集積状況を明らかにした。また、住宅都市整備団 (1991) は、住宅需要のニーズ調査という観点から単身居住者の地域的集積状況を明らかにしている。

これらの研究は、核家族以外の世帯が増大していることに注目している点では大きな貢献である。しかし、本研究の対象とする 20 代～30 代の独身者も、単独世帯のかかなりの部分を占めている (若林ほか, 1998)。従来のライフステージ論に基づく議論では、こうした人々は量的には多いものの、近い将来に核家族世帯を形成すると見なされ、さほど重視されてこなかった。しかし、晩婚化が進んでいる現在、それは単身生活の長期化を意味しており、こうした人々の実態を把握することの重要性は高い。

そこで本研究は、東京大都市圏における 30 歳代の単独世帯を営む独身女性の居住地選択の特徴とそれに影響を及ぼしている要因を、定性的な分析を通じて明らかにすることを目的とする。

定性的分析手法がその真価を発揮するのは、状況に依存した行為とその背後にある意味付けを総体として把握する手法として適しているからであり、個別変数を切り離して分析することの多い定量的手法によっては十分に明らかにすることのできない部分を補ってくれるからである。

こうした背景には、人文主義地理学の興隆、さらに近年では実証主義の背後にある研究のあり方その

ものに対する異議申し立てにより、エスニシティやジェンダーに着目しつつ文化表象を解釈しようとする研究動向が存在している。地理学研究のなかでもとくに社会地理学において定性的手法の利用が多いのは、こうした理由に基づくと思われる。つまり、本研究で分析対象とする独身女性に関して言えば、1)結婚して子育てに従事するという日本の伝統的なジェンダー役割を担っていない、2)フルタイムの就業をしているため、結婚を前提とした日本企業の従来の雇用慣行にそぐわない、3)既婚者向けあるいは学生向けなど若年独身者向けの供給ではみだされない住宅需要を持っている、といった点で、社会において少数派としてとどまっていると考えられる。また、これまで日本の住宅政策や労働政策、社会保障の主要な対象から抜け落ちることが多く、仕事や住宅の問題に関して抱いている考え方も社会の多数派の人々とは異なっていると思われる。

II. 定性的分析法の概略

まず、定性的分析法について手際良くまとめている Baxter and Eyle(1997)を参照しながら、定性的分析法の特徴や適用における問題点を整理しておこう。

定性的分析法として比較的良好に用いられる手法には、グループ討議(focus group)、深層インタビュー、参与観察、テキスト分析(会話、文章、映像)などがある。そして、定量的分析において統計的な検定が行なわれるように、定性的分析にも厳密さが求められる。そのために用いられる手順は、1)調査法の

適切性に関する説明、2)複数の調査法による検証(三角測量法的手法)、3)被調査者の選定手順に関する記述、4)発言の引用、5)インタビュー方法の詳細な説明、6)分析手順の見当、7)長期的な観察、8)再調査、9)被調査者による調査書の記録の確認、10)読者に対する説得力、11)知見が妥当であるか否かの判断基準の提示、である。このうち最初の4つは、定性的な分析手法を用いた過去12年間の31論文のうち半数以上で取り入れられていると報告されている(Baxter and Eyle,1997)。

さらに、調査者が再構築した概念と被調査者の経験との対応が適切であること(信頼性)、抽出された概念が調査対象以外の状況にも適用可能なこと(移転可能性)、調査結果が調査方法に影響されないこと(依存性)、得られた知見が調査者の見方や関心、観点、バイアスによって影響を受けないこと(確からしさ)が、厳密であることの判断基準であると指摘されている。

III. 調査方法と分析手順

(1)調査方法と対象者の特徴

調査は二つの調査方法を用いて行なった。ひとつは、1998年2月8日に実施したグループ討議(フォーカスグループ)である。その参加者は、電子メールにおいてインタビュー調査への参加を呼びかけ、これに応じた11人の独身女性であり、その年齢は全員が30代である。もうひとつは、このグループインタビュー参加者のうち10人に対して実施した深層

表1 調査対象者の属性

サンプル番号	現住所	住宅タイプ	出身地	現職	同居者
A	世田谷区	民間賃貸マンション	中野区	フリーライター	あり
B	杉並区	民間賃貸アパート	福島県	〇Aサポート事務	なし
C	江戸川区	民間分譲マンション	北海道	雑誌版権コーディネーター	あり
D	大田区	民間賃貸アパート	愛知県	営業職	なし
E	横浜市青葉区	民間賃貸アパート	千葉県	プログラマー	なし
F	大田区	民間分譲マンション	杉並区	銀行員	なし
G	千葉市稲毛区	民間賃貸マンション	千葉市	食品検査員	あり
H	世田谷区	民間賃貸アパート	埼玉県	鍼灸師	あり
I	千葉市美浜区	公団賃貸マンション	渋谷区	企画営業	あり
J	川崎市幸区	民間分譲マンション	秋田県	〇Aサポート事務	なし

インタビュー調査である。これは、1998年2月～4月にかけて、被調査者の自宅または自宅近くの喫茶店において実施した。深層インタビュー調査は、影山と木下が担当した。これは、面接調査において、調査者と被調査の間に生じる力関係およびジェンダー関係のバイアスを回避するためである。10人のサンプルは、電子メール利用者に限定されていることもあり、高学歴、高所得に人が多く、英語能力を活かしたキャリア形成をしている女性が多い。また、独身ではあるが異性と同居している人も半数いた(表1)。

(2) 分析手順

まず、二つのインタビューの記録から被調査者の発話を拾い出した。1人について1時間以上にわたる長いインタビュー記録の中から、第1章で述べたような独身女性の社会における位置づけに関連した発話を拾い出した。

さらに、インタビュー記録から抽出した発話のうち、独身女性の居住地選択に影響を与えようと考えられる要因と関連すると思われるものを整理した。これらの要因は、大別して三つあった。さらに、こうした抽出の手順および結果が妥当であるか否かを確認するために、三角測量法的な検証を行なった。つまり、深層インタビュー調査から得られた知見が適切かどうかの検討である。

今回の独身女性の独身女性に対するインタビュー記録から発話を抜き出すという手続きに関して、潜在的には以下の7種類の三角測量法的な検証が可能であった。

- ① 定量的分析による調査結果との突き合わせ
- ② サンプルング方法を変える (調査対象者を変える)
- ③ 同一対象者で調査方法を変える (グループインタビューと個人インタビュー)

- ④ 調査者を変える (男が聞き取る場合と女が聞き取る場合、年齢、居住地、既婚・未婚・離別)
- ⑤ 記録の解釈者を変える (男が解釈する場合と女が解釈する場合、年齢、居住地、既婚・未婚・離別)
- ⑥ 被調査者に分析結果をみてもらい、解釈が妥当であるかどうか吟味してもらう
- ⑦ 他のデータとの比較対照 (視点の違うインタビュー)

本研究ではこれらのうち、①、③、⑤、⑥、⑦について実施した。①については、以下においてインタビュー記録の定性的分析を行なう際、定量的分析の結果も交えて考察をする。③に関しては、調査対象者の11人に対して2種類のインタビュー(グループインタビューと個人インタビュー)を実施した。しかし、発話の内容は基本的には同一であった。それゆえ、以下の分析では比較参照は行わず、詳しい状況の説明が得られた個人インタビューの記録を基に分析を進めることとする。⑤については、神谷(男性)による解釈を影山(女性)がチェックして、解釈におけるジェンダーバイアスのチェックを行なった。⑥については、1999年2月に11人の調査対象者に対して抜き出したインタビューの発話部分とその解釈を送付し、筆者たちの解釈に誤りがないか意見を求めた。これに対して寄せられた反応は、おもに発話の中で登場する地名など特定できるものを曖昧な表現にしてほしいという要望であり、解釈の内容に踏み込んだものはなかった。それゆえ以下では、これについての検討は行なわない。⑦については、独身女性の住宅や生き方に関する文献のうち、本研究のアプローチと類似した方法を採用して書かれた単行本である松原淳子『女たちの住宅事情』との比較を試みた。住宅都市整備公団(1991)には、この他にも数多くの関連する文献が紹介されているが、インタビュー記録をそのまま資料として活用したい

いわゆるノンフィクションの分野の文献は、松原惇子のこの著作が代表的だからである。

結局、三角測量法的手法による検証を5種類試みたが、意味のある考察が実行できたのは、①、⑤、⑦の3種類である。

IV. 深層インタビューによる独身女性の居住地選択の特徴

(1) 深層インタビューから抽出した独身女性の居住地選択の規定要因

深層インタビュー調査から、独身女性の居住地選択以下に述べるような状況によって影響を受けていることが確認できた。これは、冒頭に述べた独身女性の社会における位置づけと密接に絡んでいる。

「結婚して子育てに従事するという日本の伝統的なジェンダー役割を担っていない」

現在異性と同居している人も含め、結婚・子育てに関する伝統的な日本のジェンダー役割に対して疑問を持っていることが多いものの、現在のままの生活を続けようとする確固たる信念があるわけではない。全般的に仕事に追われた生活を送っており、将来のことを見通せない状況にある。そのため、居住地の選択に関してはせいぜい数年先のことしか念頭に置いていない。このことを裏付ける発言を引用してみよう。

Aさんは、将来の生活の見通しについて、次のように述べている。表1に示したように、彼女の実家は都内中野区にあり、姉と妹も未婚であるため、そろそろ体が弱ってくる年齢に近づいている両親のことが気がかりな様子を語る。それでも、過去に親からの過度な干渉を受けた経験があるため、できる限り親とは独立した生活を保ちたいという願望も持っている。親のことは心配ではあるが、しかし一方では親と自分の生活とは距離を置きたいとも望んでおり、アンビバレントな心境がある。それに同居して

いる彼との関係を今後も維持していくかどうかも迷っており、これらが積み重なって、将来に対して見通しがきかない気持ちを語る。

1年後何してるかもわからないですからね…。

例えばもし何かがあって親が死んでもしたら、やっぱり実家に帰んなきゃいけないかもしれないだろうし…。

まあ、(3人姉妹)みんな結婚してないから、みんなどうにかするかもしれないですけど…。

何があった時こそ、っていうのは思いますね。

ただ、(親と)一緒に住んだりするのは、わからないですけど。

Bさんは、今のところ結婚の意思はないことを表明している。

なんか、(結婚したいとは思わないんで…。

思わないんで、よっぽどのことがない限り…。

(中略)

ただなんか、一人暮らしが長いと、誰かが側にいると耐えられなくて怖いんですか？

だから友達が泊まりに来て、別ていやじゃないんですけど、行くとはっとするっていう…。

一方Cさんは、江戸川区に彼と共同出資のマンションを購入し9月にそこに彼と入居予定である。Cさんの場合は当面入籍するつもりはないものの、彼の同居生活そのものには迷いはない。それでも将来的に子供を生むのか、現在の勤務先の仕事はどうなのか、といった面で、やはり迷いを持っている。

購入代金の支払は35年ローンです。

(中略)

でも、そこに35年住んでるかどうか、私わからないです。

まあ、駅前から貸せるかなとも思ってますけど…。

Dさんはキャリアとしてバリバリ働いているので、

転職もいとわない。つい最近、勤務先が変わったので、転居を考えている。それでも、そのうち転居がまたあるかもしれないので、都内の転職であればなんとか対応できるようなアクセスの良い場所を候補に上げていることを述べる。

大きさはもう、何でもいいです。

家具さえ置ければ。

でもこれが15万というと、とりあえず広さよりも便所。

とりあえずもう、長く住もうと思っていなくても知らないですから。

ともかく、今案ならいれと…。

Eさんは、結婚に対して臆病であったことを自覚するようになっていたが、だからといって結婚したいという願望を持っていないことを表明する。住まいに関して戸建てを指向しているので、独身女性でも容易に戸建て住宅に住めることをアメリカ出張の際に知っているのも、もし自分が将来も結婚しないままでしたとしても将来的に日本社会が変われば戸建てに住めるかもしれないとも考えている。

結婚するかもしれないし、わかんないです。

絶対したくはないけど、たぶんできないだろうと思います。

めんどくさいから。

努力しないし…。

どうしたらできるか教えて欲しい。

こないだも、離婚したけどできればもう1回したいっておっしゃって人がいましたけど、どうしてそんなに簡単にできるんだろうかと思いました。

私の周りって、結構、35歳こもなって離婚の人が多んですよ。

(中略)

そういう人たちって、結構、結婚、離婚、両方とも簡単に思ってるらしくて、私もそんなに簡単に離婚できるんなら1回し

ておけば良かったと思って。

今になって思うんですけど。

ほら、家と同じで間違ったらやり直せないって気が若い頃あったんですよ…。

で、離婚はかなりエネルギーが要ったって…。

でも、紙切れ一枚だからいいんだって感じ。

別に、結婚って…離婚一瞬だから、どっちが今すぐくっつくってっているのは今はないんですよ。

結婚してる人を見てて、結婚ってそんなにいいって思う人が多いんで、結構、だから…。

どうしても結婚したい、誰でもいいから、何歳まで絶対…そういうの今ないんです。

かといって、自分の今のままで一生生きてゆけるっていう自信もないんですけど。

時が経てば、いろいろと状況が変わって、もしかしたら戸建てが買えるようになるかも知れないじゃないですか。

Hさんは現在、彼と同居した生活をしているが、コンピュータ会社を辞めて鍼灸師の資格を取得してこの仕事を初めて間もないため、毎日の仕事の生活に追われている。そのため、彼と結婚するのか、将来の人生設計をどのように描くのか、そのために住居をどうするのか、といったことに関して、じっくりと考える余裕がない状況を語っている。

本当にねえ、考えてる時間が少ないというか…。

忙しいんですよ。

1日が飛ぶように終わって、とにかく仕事と必要最低限食べて、お風呂に入って寝るだけっていう感じなんで…。

なんかじっくり先のことを、仕事以外のことをじっくり考えてる時間がないんです。

Iさんは、現在彼と同居の生活を送っている。でも、正式に籍を入れるつもりは当面はないし、専業主婦になる意思も持っていないことを表明する。

どうなるんでしょうね。

でもたぶん、正式に何とか、籍入れるとかするとは思って
すけど。

今は全然どうか…。

何もいんです。

だって彼、全然収入(の将来的な見通し)がわかんないし
…。

それに実際、やっぱり身軽っていうのってすごいですよ
ね。

実際こ、ほんのちよつとの差なんだろうけど…。

籍を入れるのと入れないでね。

私も専業主婦やるつもりもないし…。

彼もそうさせるつもりもないみたいだから…。

第Ⅰ章において、独身女性の社会的な位置づけと
して、2番めに以下の点を挙げた。

「フルタイムの就業をしているため、結婚退社を前
提とした日本企業の従来の雇用慣行にそぐわない」

女性に開かれた職場(とくにフルタイムの職場)
は都心近くに立地する傾向があり、居住地の選択も
職場へのアクセスを重視する傾向が強い。転職を考
えている人もいるけれども、転職後のフルタイム職
も当然都心が多いと予想されるため、住居の選択に
大きな変化が生じるとは考えにくい。居住地選択に
際しては、帰宅時間が遅いともあって防犯や治安を
重視し、駅から近いことが重要な条件となっている。

もちろん、上記の点がすべての人に当てはまるわ
けではなく、郊外の戸建て指向の人もいるし、さら
にまた、単身者向けの住宅供給が全般的に少ないた
めに、居住地選択の範囲が限定されるという制度的
な制約の側面も存在する。これらの点を裏付ける意
見が、深層インタビューにおいても頻りに登場した。

例えばCさんは痴漢にあった経験があるため、日
頃から防犯には気を付けていることの様子をインタ
ビューの中で語っている。

夜は、たいていタクシーになっちゃいますね。

ちゃんと、枕元には防犯ベルというのを…。

玄関にも(もう一つ防犯ベルが)ぶら下がっていますよ。

これを持ってですねえ(外出するんです)…。

みんな不用心ですよ…。

私、神経質過ぎるって言われるんですけど…。

そんなことないですよ。

防犯に神経を使わざるを得ない理由のひとつに、
独身女性の帰宅時間がかなり遅いことが挙げられる。
個人インタビューを実施した10人に対して出勤
時間を尋ねたところ、自営に近い形態で働いている
2人を除く8人のある1週間における平日の平均は、
退社時間が19時10分、帰宅時間が21時25分であ
った。8人の中には、24時以降に帰宅した日が週の
うち3日の人もいた。もちろんこれは、第Ⅱ章で述
べたように、11人のサンプルがかなり高学歴の人が
多いことに起因している可能性もあり、独身女性が
すべて長時間の労働であるとは言えない。けれども、
同居する家族がいないために居住地の選択に際して
防犯を意識している人が多いことは事実であろう。

さらにCさんは、新しく購入したマンションを江
戸川区に購入した理由として、勤務先(地下鉄半蔵
門線水天宮駅近く)から近いことが重要であると指
摘する。

かといってやっぱり稼げないと、すごい田舎に住むって
いうのは私たちができないんで…。

とくに私ができないんで…。

帰ってこれなくなっちゃうんで…。

だから都内になっちゃうんですね。

もうちょっとお金があれば、それこそ文京区の方がタクシ
ーで帰ってきても安かったですけど。

(文京区のマンションを買うとしてもローンが払えないです
ね。

それでも、職場で男性と同じ様に昇進できるしくみにはなっていない現実にも直面し、仕事への意欲が減退している気持ちを述べる。

だから私もし本当に主任になったからといって、その上の保証がないんです。

あまりないんです。上っていうのが。

〇×社全体で見て、本当の管理職っていうのは、女性1人しかいないんです。

あそこはやはり、すごく保守的ですね。

私もその上(主任よりも上の職位)に行けると思っていないで、だったらどうのまがでいいなって本当に思っちゃうんです。

本当に(主任への昇進を)断るかもしれません。

どうせ出世なんかしないんですから。

あとは、減収になった時には、たぶん副業で補填していくと思うんですけど。

Cさんと同様に、Dさんも通勤時間が住居の選択に通勤時間を重視していることを指摘する。Dさんの場合には新宿周辺に転勤になったため、現住所(大田区)からの通勤が不便になって通勤時間が長くなり、転居を真剣に考え始めるようになった。今後また転勤になる可能性もあるため、山手線であれば都内に転勤でもなんとかできるので、山手線沿線が良いと希望している。

探してます。

駅ちというより、会社から遠いんですよ。

乗り換えが…。

私は実家(バスで川崎、JR線まで出て、品川経由で行ってる)で、1時間15分、バスなんて場合によっては1時間半ぐらいかかったりします。

今は、山手線上がいいですね。

出かけてることが多いんで、まず楽だってこと。

まず、新宿から渋谷までの間ですね。

でもやっぱり、新宿ですね。

あと、新宿ってたくさんあるでしょう。

(中略)

私また、転勤になると…。

山手線ぐらいがいいですね。

独身女性の職場が、都心に集中する傾向があるか否かは、個人に対するインタビューでは明瞭にはならなかった。おそらく、労働市場全体の傾向は、よほど何度も転職の経験がない限り、なかなか個人では実体験としてはつかめないよりスケールの大きなものだからであろう。

Fさんは、大学を卒業して外資系の〇〇銀行に就職した経緯について、日本企業が四大出の女子に対して差別的であるという現実の経験を持っている。外資系企業は都心立地の傾向が非常に強いので、外資系企業に勤務する女性は、都心勤務者が多くなると考えられる。

日本の銀行さんへ電話したら、第一勧銀さんは「英検一級をお持ちの方に限らせていただきます」って…。

で、住友に電話したら「うち(女性の)四大(卒の方)はとってません」って言われて…。

上から電話かけて、「あ、駄目だ」と思ってやめて…。

証券会社は、バブルの前なんですけど、割と女の人をとるっ聞いて。

まあ、営業でしょうけど…。

それで、証券会社と、後だからオリックスとかよくつか回って…。

(中略)

応募者は多かったんですけど、なぜか通って、今に至っているんですけど。

森川(1999)による外資系企業の本社所在都市の分析でも、大部分の外資系企業が本社を東京に置いて

いることが明らかにされている。さらに都内の中でも、千代田区、港区、中央区といった区に集中していることも外資系企業の立地の特色として挙げられている。

Cさんの場合には、同じ会社に勤務する彼との結婚や入籍など結婚にまつわる問題では、男性よりも女性が不利に立たされる現在の日本社会のしくみに対して不満を抱いている。そのため、できるだけ不利にならないように対策を講じている様子を話す。

どうやるのが一番得かっていうのを、いろいろと画策しているんですね。

会社には絶対言うつもりはないんですね。

結婚した女の人の立場が、非常に弱くなるっていうのをこの4年間で見てしまったので…。

リストラとかも最近頻繁なんですね。

その時に矢面に立つのは私になってしまうので…。

しばらくは、(会社で結婚のことを)言うつもりはないっていうのと、言うときにも、お互いにより有利のように・Aということ

で。
それで、世帯主とかの問題も、住民票を一緒にしちゃう場合は、私を世帯主しようっていう話をして…。

Iさんは、最近引っ越した新居(京葉線沿線)を選ぶ際、職場からの通勤時間が1時間以内であることが必須の条件であったことを指摘する。それでも、現在の職場(新宿周辺)は現住所からは遠いので、できれば近くの幕張副都心で職場を見つけて転職できたら良いなあと考えているけれども、その可能性は低いとも認識している。

ちょうど今の住んでるところ建てた時に、モデルルームオープンって、まだ建設中じゃなかったんですね。

そんな時ちょうど見に行って。

あ、幕張より、こっちの方が全然いいなあ。

私もね、幕張までぐらいいでがね、デッドラインがなかったって思ってた。通るのが。

ちょうどあそこだと、ここ(新宿周辺)まで1時間ぐらいいでから。

ちょうどデッドラインがなくなって思ってたんだけど。

でも、幕張にある会社って、ベンチャー企業ないから…。

そんなに(ベンチャー企業)ないんですよ。

あったら紹介して下さいね。

私もたまたま…私もこういう業界が好きなんです…。

今もコンピュータです。

一方、Eさんは田舎の生活環境を好むので、職さえ得られれば決定的な田園生活をエンジョイしたいという願望を表明する。けれども、職場は世田谷区の新玉川線沿線にあるので、せいぜい現住所である東急田園都市線沿線の横浜市青葉区あたりが限度かなあと考えている。さらに、単身者向けの賃貸住宅の供給が郊外では非常に少ないことにも不満を抱いている。

中野の方なんか行くとほんとに安い…。

たまたまアパマンがみか見てて。

学生さんが多いので、(中野あたりでは賃貸住宅が)いっぱいあっていいなって思って…。

で、私勤めが新玉川線沿線なので…

なるべくここから離れたくないんです。

自由が丘に住んじやう人もいますけど…。ちょっと私は…

私はやっぱり緑と青空が好きなので…。日当たり…。

だから、そんなに東京指向がないんですよ。

会社ももっと田舎にあったら、田舎に行きたいか思ってるんで。

だから、この辺でいいかなって思って…。

「既婚者向けあるいは学生向けなど若年単身者向けの供給では満たされない住宅需要を持っている」

独身女性が既婚女性と大きく異なる点は、単身生活を維持するために所得を自分で必ず得なければならないことにある。

自分たちの住宅ニーズに適した住宅ストック（1LDK～2LDKの広さの住宅）が少ないため、居住地選択の際の選択肢はかなり限られている。賃貸契約や融資の名義、保証人の問題で、ジェンダーにかかわる問題にぶつかった経験を持つ人が多い。

Bさんは、女であることを理由に不動産屋で適当にあしらわれた経験を持っている。

これは雑誌で見て、明大前にビルとかがあったんで、そこじゃなくて別のところ紹介されたっていう…。

あれは、おとりですね。

（中略）

このマンションは、イラン人が占拠してるからって言われたんですよ。

女の子は勧められないって言われたんですよ。

（中略）

不動産屋の兄ちゃんが、バブルの申し子みたいなの、くすんだ紫のダブルのスーツみたいなのあるじゃないですか。

Eさんは、英語を活用し、海外での生活経験もあることから、日本の住宅事情を比較的冷静な目で見ている。さらに、住宅事情だけでなく、日本の社会全般や経済システムに関しても、これでよいのだろうかという漠然とした不満がある。

私は会社も外資系でさくばらんに生きていますけど、住宅事情になると、突然日本の文化に引き戻されますよね。前もアメリカにいた時に向こうの友達も、ぶつぶつ言ったことがあるんですけど…。

「日本だと女一人で住めないし…」と言うと、「子どもがいて住めないのはわかるけど、女一人でダメなの？きれいに使えよ」とか。

向こうだと本当に、30ぐらい女の子が独身でも家買っちゃっ

たりするし…。いざあと思って。

買ってからこう、汚い家でも中を整理したり、そういうのが楽しみって感じで、いいなあと思って。

またEさんは郊外に住んでいて人生の将来が定まっていなかったために、住宅を引っ越す可能性が大きく、そのために家具を増やさないように心がけた生活を心がけていることを述べる。そして、郊外に単身者向けの賃貸住宅の供給が少ないことを嘆いている。

こないだも不動産屋さんと話したんですけど…。

私みたいなのが住みたい、ワンルームじゃちょっとやけど、ファミリー向けって子どもが2人ぐらいいいじゃないとこにも住めないっていう人向けの住宅をもっと作ればいいのにねって、言ってたんですけどね。

（中略）

私も1人で住んだから、ちっちゃい部屋がいっぱいある必要はないんですね。

（中略）

30過ぎてもワンルームに住んでる人がいますけど、どうやって生きているっていうのはおかしいけど、物を増やさないように努力してるのかなって思いますね。

私、また引っ越すかもしれないと思うと、あんまり家具って買わないんですね。

家具って増やせないですよ。賃貸の身って。

今は置き場がいっぱいあるけど、次のところは、どうなるかわからないっていうのと。

増やせなくて、段ボール生活になっちゃって。

Fさんは、できればあまり古くないマンションの購入を希望していたが、そうした物件はバブル期のものであるため市場からほとんど出回っておらず、また、単身向けの物件が少ないために、住宅探しに苦労した経験を語る。

昭和60年過ぎぐらいの物件は全然出回っていないんです

よ。とりあえず、私が買った時は、せいぜい(築)5~8年ぐらいまでって言うと、もの自体がなくて…。

まあしょうがないから(築昭和)58年まで…。

(前に住んでいた)江東区(のマンション)が確か(築昭和)58年だったんで、それより古いのがいやだったんですよ。ただたんにそれだけの話なんですよ。

そいで探したら、結局なかなかなくて、何戸か見に行っただけど…。

やっぱり古いのと、あとは家族対象のやつとか、やっぱり10年後ぐらいのマンションはそういうのが多くって…。

決まんないし、早く焦ってて。

自分でも住宅情報買ってみたら、ここが4100~4200万くらいで出てたんですよ。

Bさんも、単身者向けの賃貸公営住宅の供給が非常に少ないことを嘆いている。

今、公社に申し込んでるんですけど、たぶん外れると思うけど。

東京都で公社ですけど…。

これだと、単身者あるんですけど。

ただ、すごく遠かったりするんですね。

単身者申し込めるところ自体が、

私が気が付いたのは、去年ぐらいなんですけど…。

公社で去年(申込票を)買ったときに、(申込資格審査が)大丈夫だったんですけど、それは本当に売れない端の方だったんです。

今回見ると、まだだんだん都心に近づいてきている、単身者が申し込みできるところが…。

増えてますね。

バブルの崩壊以降マンションは供給過剰の状態にあるため、単身者向けの供給もかなり多くなりつつある。また、不動産市場の重要なマーケットとして単身者の重要性も増大している。しかし依然として、単身者向けの物件そのものが少ない。公団や公営住

宅の入居条件もかなり緩和されてきてはいるもののまだ制限が残っている(若林ほか、1998)。このため独身女性は、民間の賃貸住宅から分譲住宅を選ばざるを得ない状況は根本的には変わっていない。

V. 三角測量的手法による検証

(1) 調査者のバイアス

第IV章で述べたような深層インタビュー調査を解釈した結果は、神谷が行なったものであった。こうした神谷の解釈がどの程度妥当であるかを検証するために、影山が同じテープを聞いて、神谷が注目しなかった点なども含めて、観察する人間の違いによって、どの程度結果の解釈に違いが生じるのかも手短かに検討しておきたい。

解釈の違いに移る前に、まず、神谷と影山の背景についてふれておく必要があるであろう。もちろん、男性と女性という違いがある。さらに、年齢がほぼ一回り違う(神谷は42歳で影山は30歳)。さらに、東京での生活経験も大きく異なり、神谷は数年前に1年間だけ東京で生活を送った経験があるが、それ以外は地方での生活である。これに対して影山は、高校まで愛媛県で育った後に東京郊外に移り住み首都圏での生活を10年以上経験してきた。ただし、もちろん2人とも地理学を専門としているため、東京大都市圏における住宅の状況や就業状況、交通問題について一般の人々に比べればかなりの知識を持っていることは言うまでもない。

影山が神谷の分析結果をチェックした結果、以下の3つの点が抜け落ちてしていると指摘した。

1) 居住歴や住み心地についての被調査者の意見を、神谷は居住地選択の規定要因として取り上げていない点

影山は、居住歴や住み心地が居住地の選択にきわめて重要なので、これを省くべきではないと主張する。これに対して神谷は、もちろん居住歴や住み心地が重要であることは認識しているが、この問題は、

独身女性に限った問題ではないと考えて、上での分析では取り上げなかった。

この問題は、既婚世帯の居住地選択を規定する要因が何であるのかと比較することによって、その位置づけがより明確になると思われる。

2)親との関係について神谷は取り上げなかったが、影山はもっと重視すべきであると主張する。おそらくこの点が、調査結果に対する解釈におけるジェンダーバイアスであろう。というのは、日本社会において老親の介護を引き受けているのは実質的には女性であることが多く、解釈者が男性(神谷)の場合にはこの問題に気づかない傾向があると考えられるからである。

3)パートナーの有無によって居住地選択がかなり左右されると影山は主張し、神谷がもっと重視すべきであると言う。

影山のこの指摘を受けて、神谷は上記の3つの要因を抽出した過程を振り返ってみると、確かにパートナーの重要性は気づいていた。しかし、パートナーの問題を取り上げると、「単身者」・「独身者」とは一体どういった人たちなのか、という定義の問題にも踏み込まざるを得なくなるため、そうした問題に深入りしないためにパートナーとの関係は意識的に排除したと思われる。今回の調査対象者は30

代の人たちであったが、異性との付き合い方は多様であり、ふだん同居していて婚姻届けを出していないだけの人たちから、週末だけ異性の友人が訪れる人、異性と同居していても別れることを考えている人など、置かれている状況は様々であった。この点を考えれば、パートナーがいるかどうかは重要であろう。しかし、パートナーの存在によって居住地の選択がどのように変化するか一定の方向性が思い浮かばなかったため、あえて避けた。

(2)松本淳子『女たちの住宅事情』との比較検討

第1章でも述べたように、1980年頃から独身女性や単身生活者の生活や住宅に注目が集まるようになり、様々な学術論文や出版物が発表されるようになった(住宅都市整備公団1991)。本節では、これらの中でインタビューに基づいて執筆された本を取り上げ、そこに描かれている独身女性の居住環境を本研究の深層インタビューの分析結果と比較検討する。

1. 松原淳子のノンフィクション『女たちの住宅事情』の位置づけ

『女たちの住宅事情』を執筆した松原淳子は、この本によってデビューしたと言ってもよいだろう。表2は、松原淳子の代表的な著作リストを示してい

表2 松原淳子の主要著作

1987年	東京23区 女たちの住宅事情	文藝春秋(文春文庫「女たちの
1988年	クロワッサン症候群	文藝春秋(文春文庫1991年)
1989年	「英語できます」	文藝春秋(文春文庫1993年)
1990年	女が家を買うとき	文春文庫
1992年	いい女は頑張らない	東急エージェンシー出版部
1992年	35年ぶりの日記	PHP研究所
1993年	ひとり家族	文藝春秋
1994年	年をとるのはこわくない	PHP研究所
1995年	私を探す旅	文藝春秋
1995年	そのままの自分でいいじゃない	PHP研究所
1996年	老いの住処はどこにする	リブリオ出版
1996年	ルイヴィトン大学校通り	講談社
1997年	続 老いの住処はどこにする	リブリオ出版
1997年	素敵なおばあさんになりたい	ベストセラーズ
1997年	いい女は「生き方」なんかこだわらない	PHP研究所

表3 「女たちの住宅事情」(1995)に登場する人物の属性

年齢	タイトル	住宅タイプ
1章 38歳位	かっこいい住いも仕事のうち 南青山に住むスタイリスト	民間賃貸マン
2章 33歳	立ち退きをせまられています 原宿に住む元高校教師	民間賃貸アパ
3章 40代前半	六畳間はブランド品でいっぱい 阿佐谷に住む地方公務員	民間賃貸アパ
4章 29歳	はやく家を出ていきたい 世田谷の実家に住むOL	実家(戸建て)
5章 37歳	更新時期がくると頭が痛くなる 自由が丘に住む料理コンサルタント	民間賃貸マン
6章 33歳	ピンクづくしの部屋 白山に住む美容師	民間賃貸マン
7章 36歳	ひとり暮らしは用心するに限る 中野に住むキャリア・ウーマン	民間賃貸マン
8章 37歳	家は単に時差を調整する場所 両国に住む国際線パーサー	民間賃貸マン
9章 42歳	またマンションを買い換えるかも 文京区に住む編集者	民間分譲マン
10章 33歳	家に五万円いれてます 練馬区の実家に住むOL	実家(戸建て)
11章 46歳	私は不動産屋があります 渋谷に住むデザイナー	民間分譲マン
12章 40歳	男運はないけど、金運はあるみたい 東京近郊に住む翻訳家	民間分譲マン

『女たちの住宅事情』を執筆した松原惇子は、この本によってデビューしたと言ってもよいだろう。

表2は、松原惇子の代表的な著作リストを示している。この本の出版以降、独身女性の生き方を主題にした著作を発表し続けている。

表3は、『女たちの住宅事情』に登場する女性のプロフィールを示している。この本を通読すると、住宅を通して独身女性の人生を応援するというニュアンスが強く感じられる。例えば、裏表紙の帯書には、次のように書かれている。

南青山に住むスタイリスト、阿佐谷に住む公務員、世田谷の実家のOL、両国に住む国際線パーサー、渋谷にマンションを買ったデザイナーなど12人の女性を訪ね、それぞれの家や部屋を見せてもらいながら、なぜそこに住むようになったのか、彼女たちの仕事や生活についての本音を聞きながら、これからの女性の生き方を考える。

あれから、登場してくださった女性たちはどうしているのだろうか。今でも同じところに住んでいるのだろうか。気になる

ところだ。そこで彼女たちのその後の住宅事情について、わかる範囲でご報告したい。

まず調べてみて驚きだったのは、賃貸住宅に暮らしていた六人のうち六年前と同じところに住んでいた人は、たった一人しかいなかったことである。それだけ、女性の生き方は流動的だといえることができてしまふ。

(中略)

賃貸マンションやアパートに暮らしていた人たちには、その後、大きな変化がみられたが、自己マンションに住んでいた人たちには、当然といえば当然だがまったく変化はみられなかった。

(中略)

住いは、その人の生き方を表す。彼女たちが最終的に、どこに落ち着くのか、私は知るよしもないが、みんな、一生懸命生きていることだけは確かだ。

東京の空の下で、女性たちは、どこかがんばって生きている。文庫にするにあたり、久しぶりに読みかえてみて、そのことを痛感した。

これらの記述から松原惇子の本は、たんに住宅問題だけを扱ったマンション購入のノウハウ本ではなく、独身女性の自立した人生を応援する、すなわち「独身であり続けること＝働き続けること」に対する共感であふれている。もちろんノンフィクションとはいえ作家による作品であり、登場する女性に対してたんなる感情移入だけで構成されているわけではない。作家特有の冷徹な目で女性の生活を記述していると言えるだろうが、その背後にはこうした共感の気持ちが存在する。

それゆえ、『女たちの住宅事情』は、本研究の視点ときわめて類似しており、比較検討するにはきわめて適切な素材であると言えよう。

『女たちの住宅事情』が単行本として発刊されたのは1987年であり(文庫本は1995年)、前年の1986年6月に施行された雇用機会均等法に代表されるような働く女性の地位を向上させようとする動

きと軌を一にしていたことも、ベストセラーとして社会に受け入れられた要因であると考えられる。

ちなみに、今回の被調査者のうちの数人はこの本を購入していた。それゆえ、この本は首都圏に住む独身女性にかなり読まれた本であると言える。ただし、東京以外の地域では、逆に知名度は低いと思われる。金沢市の神谷の知り合いというきわめて狭い範囲であるが、この本を呼んだことのある人は存在しなかったし、また松原淳子という作家の名前すら知っている人もいなかった。

つぎに、松原淳子の本に登場する女性の属性と、今回のインタビューを実施した11人との属性の違いについてもふれておきたい。松原の本に登場する女性の属性は、表2に示した。この12人とインタビューを実施した11人を比較すると、以下のような違いが存在する。なお以下では、表記の簡便化のために、松原淳子の『女たちの住宅事情』に登場する12人を「女たち」、本研究の被調査者の11人を「独身女性」と表す。

- ①「女たち」では自由業が多い（「女たち」は12人中4人、「独身女性」は11人中2人）
- ②「女たち」は年齢層が高い（「女たち」は40代が4人、30代が8人、「独身女性」は全員30代）
- ③「女たち」は登場人物が都内にあちこちに散らばるよう努力した形跡が見られる
- ④「女たち」には本当のキャリア女性はいない（「独身女性」では、Dさん、Fさんが該当する）
- ⑤「独身女性」は、インターネット利用者であるために、高学歴、高所得である。

なお、③の点に関しては、ノンフィクションのテクニクとしてか、松原淳子の本では、各章の冒頭に地域の記述があり、章末には、インタビューを終えた後の松原の気持ちが記されている点も特徴的である。

2. インタビューの結果とノンフィクション小説と

の対照

では、今回の調査で独身女性の居住地選択と深い関連を持つと明らかになった3つの点が、松原淳子のノンフィクション小説の記述に対して、どの程度妥当性を持つのであろうか。この点について、順次見ていきたい。

1)松原淳子の本に登場する女性は、必ずしも日本のジェンダー役割に対して疑問を持っているとは言えない。あるいは松原淳子が、この点について明確な形では尋ねていないのかもしれない。将来見通しの不安定さに関する言及はあるものの、それが必ずしもジェンダー役割への疑問から生じているとは言えない。

こうした違いは、二つのサンプルの違いに起因している可能性もある。すなわち、「女たち」の登場人物は相対的に年齢層が上であり、また自営業の人が多いため、反対に安定した職業を持つことへの願望となっている可能性もある。また、「女たち」の中に登場する女性の中に、親と同居する人が含まれることに原因があるのかもしれない。

〔第2章では、急に大家が土地を売ったため立ち退かざるを得なくなり、埼玉県の上福岡に引っ越すことになった主人公が、新しいアパートで編み物教室を開くプランが浮かび、新しい展望が見えてきたことを語る。〕

「立退きの話があった時に私、本当に困って、結婚して上福岡に住んでいる友人のところに相談にいったんです。そしたら彼女がこっちに引っ越してきたらいいんですよね。知人の工務店の人が趣味で建てたアパートがあるからそこを借りたらどうかって。最初、えっ上福岡、こんな田舎って思ってたんですけど好奇心でアパート見ていったら、とっても気に入っちゃって、住みたくなっちゃったんです。白い洋館でふ

きぬけのロビー。部屋は板敷のワンルームで天井が高い

んです。明るくて気持ちのいい部屋、家賃は四万二千円。こんな部屋で編物教室開いたらいいだろうなって、その時、スーと自然に編物教室、という仕事のアイデアが浮かんできたのです。これだわ、私の探していたものは…未来がパッと明るくなるような気がしました」(p.52)

「第3章では、地方公務員である主人公が、老後の生活の見通しについて語る。」

「私はね…子どもがいえるわけじゃないですもの、家を残したってしょうがないでしょ。一生借家でもっているの。定年退職したらだいたい二千万円ぐらいもらえるでしょ。それに年金は一月二十万円ぐらいでるんじゃないかしら。女ひとり生活していくのにそれだけあったら十分よ。アラ、でもゴルフや海外旅行をするとなるとちょっと足りないかしら」彼女はやっと考えこむ格好をした。「そうね、でもその分パートの仕事をして働かればいいわね。私、遊びのために働くのだったらスーパーのレジだって、ビルそうじだって何でもかまわないわ。そういうものでしょ。ゴルフ場の近くに小さなマンションでも借りて…。ゴルフ三昧の老後を送る。老後はゴルフ場の近くに住みたいわ」(p.78)

「第6章では、結婚願望を持っている美容師が、希望通りにいかなかったらと将来の見通しの不安定さについて語る。」

何ごとにも計画的にやってきた久美子さんが結婚だけは計画通りじゃなかったようだ。

「これだけは相手のあることから、自分の努力だけでは、どうにもならないことでもあるのね。これだけなのよ、予定通りでないものは…」(p.144)

「さらにこの美容師は、今後の見通しについて次のように語っている。」

「私は、三十五歳で見切りをつけようかと思っているの。東

京に残るか、国(長崎県)に帰るか、結婚するのか、独身でいるのか、三十三年間、それらしい男性が現れなかったのに、あと二年で現れるとは思わないけど、三十五まで待って結婚できなかったら、きっぱりとすべてを捨てて国に帰るかと思っているのよ」この結論に達するまでにも、彼女は相当悩んだようだ。そして三十五というラインを自ら自分に引いたのだ。

「私の本当の本当の理想はネ、結婚して今の仕事を続けることなの。だって、既婚者は六時であがれるんですもの。もちろん、その時は店長のポストは降るけど…そうすれば東京に残れて結婚もできて…でも現実はどうもよくないのよね」(p.145)

2)職場へのアクセスが居住地選択にとって重要である点が、松原淳子に登場する人物の発言の中では、さほど浮かび上がってこない。これは、松原淳子の本の登場人物が自由業が多いせいであると考えられる。しかしたとえ自営業であっても、仕事上での利便性や防犯の問題は、しばしば言及されている。

「第1章では、スタイリストの職業のために青山周辺での仕事が多く、職場への近接性が住居選択の隠れた大きな要因であることが述べられている。」

もちろんこのことが南青山に引越した直接の原因だったが、彼女が引越が引越しくなくてと思っていた。それは、江戸川アパートの立地問題があったからである。

「アパート自体は気に入っていたけれど、ネックは外堀通だったの。アパートから港区方面に行くには外堀通を使わなくてはいけなくて。ところがこの通がしょっちゅう渋滞するの。五分でいけるところ、そこは一時限かかることがあるのよ。スタイリストの仕事って、荷物をとりこいったりもどったりが多いでしょ。外堀通のおかげで一日、三ヶ所まわるところが一ヶ所で終り。とっても仕事をする上で能率が悪かったの。スタイリストの仕事するにはスタジオやファッション関係の会社が集中している港区に住むべきだとつくづく思うわね。今は江戸川アパートにいた時の三倍の仕事はこな

していますもの。そういう意味ではイタリア人に感謝！」

スタイリストの仕事と交通の便が深いかわりがあるとは気がつかなかった。私には新しい発見である。

私にスタイリストの仕事って、タクシーの運転手みたいなのよ。走行距離でいったら他くの運転手さんに負けないんじゃないかしら」(p.23)

〔第5章では、7万5千円のマンションから駅前の14万円のマンションに引っ越した理由として、車をやめたので実質は同じであるという説明の他に、別の二つの理由を挙がられている。〕

それに理由はもう二つあった。一つは七万五千円のマンションは一階であり一度空襲に入られたことがある。安全の意味からも高い階に移ったかった。もう一つの理由はとりあえず、次の仕事が軌道に乗るまで再び料理教室を開こうと思ったので人を集める意味でも駅前に近い所に住む必要があった。(p.119)

〔第7章では、登場人物が防犯ことも稀経歴になって、部屋には人を入れないことにしている様子を語る。〕

「ええ、そうよ。私、どんなひとがブザー押しても絶対ドアを開けないんです。だってドアを開けて押し込まれ、かざをかけられたら終わりですよ。ドアを開けるのはとてもこわいです。たとえ女性でも子供でも開けないですよ」(p.168)

3) 松原淳子の本に登場する本では、単身者向けの住宅供給が限られている点にはほとんど言及されていない。つまり、松原淳子の本は「住宅」がテーマではあるけれども、「住宅問題」はテーマではない。賃貸契約や融資の名義、保証人をめぐるジェンダーにまつわる諸問題に関しては、一例だけ言及がある。

「第9章では、編集者である登場人物が、マンション購入資金をめぐる銀行とのやりとりについて話す。」

「手付け金をうってから、住友銀行に行ってマンションを買う

ので一千万円貸してもらっているのに行ったんです。そして、女から貸せないって。それで私に頭に来て、うちの会社はお宅の会社と取引があるんですよ。それでも信用しないんですかって言ってやっただす。うちの会社の名前をいったら貸してくれました」(p.204)

以上の比較考察をまとめると、松原淳子の本は住宅問題という側面はあまり強くない。深層インタビューから明らかとなったような防犯や職場へのアクセスを重視した独身女性の居住地選択という姿は、「女たち」では明瞭には描かれていない。また、将来の生活が見通せない状況は共通しているものの、日本の社会や企業におけるジェンダー役割への疑問も明確とはなっていない。賃貸契約や融資の名義、保証人をめぐるジェンダーにまつわる諸問題も「女たち」ではほとんど描かれていない。

こうした違いは、年齢層や職業による違いとも考えられるが、むしろ『女たちの住宅事情』が執筆された時点と現在では、独身女性の置かれている状況がかなり変わった可能性の方が大きい。雇用機会均等法の施行によって、あるいはサービス経済化の進展によって、働き続ける女性はこれまで以上に増大している。しかもそれは、企業に雇われながら勤務する形態が増えているのであり、かつてのような自営業などの形態ではない。第2章でも述べたように、外資系企業の本社は都心集中の傾向が顕著であり、独身女性は外資系企業に勤務することが多いのも、こうした雇用形態の変化の一端を示しているのだろう。女性全体を取り巻く雇用状況の変化と居住地との関係は今後の検討課題であるけれども、欧米の都市にみられるようなジェントフィケーションに類似した現象が東京でも生じている可能性も推測できよう。

VI. むすび

本研究は、近年において増大している単独世帯のうち、30代の独身女性に焦点を当てその居住地選択

を分析した。東京大都市圏に居住し、現在働いている単独世帯の独身女性に対して実施したインタビュー調査に基づき、これに対して定性的な分析を試みた。

インタビュー調査を分析した結果、以下のような結果が導き出された。

1) 結婚や仕事に対して将来的な見通しを持っていないために、居住地選択に際してもせいぜい数年先しか念頭においていない。

2) 女性に開かれたフルタイムの職場は都心が多くしかも帰宅時間も遅いため、居住地選択では職場までのアクセスを重視し、駅近くを指向する傾向が強い。また、一人暮らしの生活であるために治安や防犯を重視した居住地の選択を行なっている。

3) 従来の公的住宅政策は家族向けの住宅供給が中心であり、民間住宅市場も単身者をターゲットとしてこなかったこともあり、独身女性の住宅ニーズに適した住宅ストックはかなり限られている。これと関連した問題として、賃貸契約や融資の名義、保証人の問題で、ジェンダーにかかわる問題にぶつかった経験を持つ人が多い。

さらに、インタビュー調査の解釈を男性ではなく女性が行なってこれらの知見の妥当性を検証した結果、親との関係やパートナーとの関係も独身女性の居住地選択に影響を与えている可能性も示唆された。ノンフィクション作品に描かれた独身女性の住宅をめぐる記述と比較した結果、上記の知見は、雇用機会均等法の施行や経済のサービス化の進展、東京の世界都市化といった近年の東京の都市経済における変化と関係していることが示唆され、それ以前の状況とはかなり異なることも明らかとなった。

こうした知見が、定量的分析によって導き出すことが難しいものであるのなら、本研究で定性的な分析を試みた価値があると言えるだろう。そのためには、本研究で得られた分析結果がどの程度の妥当性を持つのかをさらに確認することが必要だろう。

[付記]

本研究にあたっては、平成9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究課題番号 09680165 (研究代表者：東京都立大学若林芳樹)の研究費の一部を使用した。

参考文献

- 石川義孝(1999)：京浜・京阪神の二大都市圏における単独世帯、『成田孝三先生退官記念論文集』大明堂
- 北澤毅・古賀正義編著(1997)：『社会を読み解く技法—質的調査法への招待—』福村出版、212頁
- 木下禮子(1999)：『東京圏における中年女性単身世帯の居住実態と居住移動』東京都立大学大学院都市研究科修士論文
- 住宅都市整備公団(1991)：『首都圏における単身居住者に関する研究報告書』
- 松原淳子(1995)：『女たちの住宅事情』文芸春秋
- 森川大輔(1999)：『外資系企業の立地からみた国内における都市階層構造』金沢大学大学院文学研究科修士論文
- 若林芳樹・由井義通・矢野桂司(1998)：東京大都市圏における独身女性の居住地選択—統計資料とアンケート調査による定量的分析—。人文地理学会大会発表要旨。
- Baxter,J. and Eyles,J.(1997): Evaluating qualitative research in social geography: establishing 'rigor' in interview analysis. *Transactions of the Institute of British Geographers NS*, 22, 505-525.
- Hall,R., Ogden,P. and Hill,C.(1987): The pattern and structure of one-person households in England and wales and France. *International Journal of Population Geography*, 3, 161-181.